

い た だ き ま す

高学年2-5】

視聴覚教材を活用した取組み

- (1) **主題名** 感謝の心〔2-5〕
 (2) **ねらい** 人々の支え合いや助け合いの中で自分が生かされていることに感謝し、それにこたえようとする意欲を育てる。
 (3) **資料名** 「いただきます」
 (4) **授業の展開例**

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 「心のノート」 P 52, 53 を読み、「はい」「いいえ」のどちらかのボタンにふれてみる。	「心のノート」P 52, 53 を開いて読んでみましょう。そして、正直な気持ちでどちらかのボタンを、そっと押してみましょう。 ・迷うなあ。	静かな気持ちで授業に入るよう工夫をする。
展	2 資料「いただきます」を読んで話し合う。	○裕太がピーマンを食べないのは、どうしてでしょう。 ・嫌いだから。 ・においがいやだから。 ・食べなくても、困らないから。 ・食べなくても、しかられないから。 給食室で働いておられる先生方の姿を見て、裕太はどんなことを思ったでしょう。 ・こんなに暑い所で僕たちの給食を作ってくれているんだ。 ・たった4人で602人の給食を作るのは、大変だろうな。先生たち、すごい汗だ。 ・僕がピーマン嫌いなこと、先生は知らないんだろうな。 ・先生たちは、僕たちのために一生懸命おいしい給食を作ってくれているんだ。 ・今日の野菜炒め、どうしよう。 裕太の給食の先生に伝えたいことについて考えよう。 ・まだ、ピーマンは食べれないけれど少しずつがんばってみます。 ・これからは好き嫌いをしないで何でも食べます。	給食室で働いておられる先生の写真を掲示したり、ビデオを見せたりする。
開	3 裕太の伝えたい気持ちについて考える。	○ワークシート等に記入させ、発表させる。 ○給食の先生の思いに何とか自分なりに応えようとしている裕太の気持ちに、気付かせたい。	
	4 自分たちの生活を振り返る。	裕太のように、誰かに感謝の気持ちをもって、それに応えようとしたことはありませんか。 ・監督に教えてもらったことを試合の中で出しきった。 ・おばあちゃんと約束したことを守ろうとがんばっている。	生活を振り返り、自分を支えてくれている人たちへ感謝の気持ちをもたせる。
終末	5 教師の説話を聞く。	・自分のまわりには、自分を支えてくれている人がたくさんいるんだな。	教師自身が感謝の気持ちをもった体験を話し、心から感謝の気持ちをもつと、必ずその思いに応えようとしている自分がいることに気付くことも伝えたい。

いただきます

「裕太、またピーマン残して！」

「だつて、きらいなんだもん。いつてきまーす。」

裕太は、ランドセルをかかえて玄関を飛び出しました。

「好ききらいをしないで何でも食べないと・・・。」

お母さんのいつもの言葉がだんだんと遠ざかります。

「なんで朝から僕の大きらいなピーマンなんか入れるんだよ。もう、いや

なつちやう。ピーマン食べなくとも病気になんかならないじゃないか。僕にはこんなに元気、元気。」

裕太は、ピーマンが大きらいでした。お母さんが料理の仕方をいろいろ工夫して、何とか食べさせようとするのですが、なぜか、どんなに小さくしても、あのピーマンのにおいは裕太を「こまかすこと」ができないのです。

でも、学校の給食は、「だつて、きらいなんだもん。」ではすまされません。

担任の大山先生に、

「なんだ、裕太。ピーマンきらいなのか。」

と、みんなの前で大きな声で聞かれて、つい、

「いいえ、そんなことないです。」

つて、答えてしまったのです。それから、あの手この手で食べなくてすむ方法を考えたのですが、もうそろそろそれも限界。ただ一つ救いなのは、時間が来たら、

「給食の先生が片づけられるのに迷惑をかけてはいけないので、残して返しなさい。」

という先生の言葉だけです。

実は、今日の給食は、ピーマンたっぷりのチンジャオロース。裕太は、はしを持つて、ちらつと大山先生の方を見ました。大山先生は、おいしそうに口の中にチンジャオロースをほおばつて、裕太の顔を見ています。ドッキン！ 裕太の胸が高鳴り始めました。大山先生は、にこつと笑つて裕太にブイサインを送りました。しかたなく裕太も小さくブイサインを返して、はしをチンジャオロースにさしこみました。でも、やっぱり食べられません。キンコーンカーンコーン、救いのチャイムが鳴りました。（やつたあ。）裕太は心の中でそう叫んで、返しに行こうとすると、大山先生がそばにやってきました。

「裕太、明日の大休憩、先生につきあえ。」

「先生は小さな声でそう言うと、教室を出ていつてしましました。」

「ああ、明日の大休憩、しかられるのかな・・・。」

裕太は、その晩、なかなか眠ることができませんでした。

次の日の大休憩、約束通り裕太は大山先生のところへ行きました。大山先

生は、

「ちょっとついでこい。」

と言つて、どんどん先に歩いていきます。着いたところは、給食室でした。網戸あみどごしに給食室の中を見ると、中から、ムツとする空氣くうきが流れできました。

大きな釜にぐらぐらとお湯が沸いていたり、熱い油で魚を揚げたり・・・トントントントントン・・・・・まな板の上である裕太の大きいなピーマンが手際よく千切りにされています。

「うわっ、今日もまたピーマンか。」

裕太は、ガックリしました。すると、大山先生が、

「裕太、うちの学校には子どもだけで何人いる。」

と、聞かれました。

「・・・五百六十人かな・・・。」

「うん、先生たちの人数は、四十二人だ。この給食室で作られている給食は何人分か計算できるか。」

「簡単だよ、六百二人。」

「そうだ、六百二人分の給食を四人の先生で作つておられるんだ。」

「ええ！たつた四人で。」

裕太は、もう一度給食室をのぞいて見ました。本当に四人しかおられません。あの山盛りのピーマンを大きなフライパンの中に、ジャーッ！と入れ、一生懸命大きなしゃもじで混ぜ合わせたり、忙しそうに材料を運んだりしています。一人の先生が、真っ赤な顔にいっぱい汗をかいて重い食缶を両手にかかえ、裕太のそばにあるたなに置きに来ました。そして、マスクをちょっとずらして、

「今日の野菜炒めは、とびつきりおいしいのをつくるからね、しっかり食べるんだよ。」

と裕太に言いました。

給食室から離れると、さつきの熱風のような風とはうつて変わって、すすしい風が裕太の頬をなでて通りました。裕太のシャツはいつの間にか汗でぬれていきました。

「今日は、ピーマンの入った野菜炒めか・・・。」

給食の時間、いつものようにみんなに給食が配られました。

「いただきます。」

いつもの言葉です。でも、今日の裕太には、いつもとはちがう「いただきます」の言葉に聞こえました。

活用に生かすための実践報告

「いただきます」

1 主題の設定

・人は、日々の生活の中でたくさんの人たちの支えや助けによって生かされている。しかし、それに気付くことなく当たり前のこととして暮らしてしまっていることが多い。そして、謙虚さを忘れ、自己の権利や利益を追求してしまいかになる。子どもたちの世界でも同じことが言える。ただ、子どもたちの場合は、知らなかつたり気付かなかつたりしていることが多い。そこで、身近な給食を題材にして、自分たちを支えてくださっているたくさんの人たちのことに気付かせたい。そして、自らの生活を振り返り、これから生き方を考えることができればと思う。家庭や学校、地域の中で互いに感謝しあう気持ちをもつことによって、ぎくしゃくした人間関係を温かい関係に変えていくことができるはずである。また、心から感謝の気持ちをもつと、必ずそこには、相手の気持ちに応えようとしてがんばる新たな自分が生まれているということにも気付かせたいと考える。

・この資料は、食べ物の好き嫌いのはげしい児童にポイントをおくのではなく、自己主張が強く周りの人の気持ちを考えようとしている児童にポイントをおいて指導することが大切である。つまり、子どもたちが他者の気持ちより自己の利益にとらわれ、身の回りの人間関係がうまくいかなくなってきたように感じた時に扱うと効果的であると考える。

2 指導過程の工夫

・給食室や給食センターで働いておられる先生方の様子を、写真やビデオで撮り、展開の前段でみせると効果的である。
・展開の後段では、日常生活の中で児童の様子をよく見ておいて、裕太のような気持ちになりがんばっている児童のことを紹介することも大切である。また、「心のノート」に書き込んでいる児童がいたら、それを発表するようにしてもよい。

3 発問の工夫

・中心発問では、裕太がピーマンを食べるか食べないかではなく、先生の気持ちに応えようとする裕太の心を大切にしたい。
・中心発問を「裕太はこの後、ピーマンを食べたでしょうか。」とすることも考えられる。その際も食べた、食べないの結果だけで論争するのではなく、どちらも感謝の気持ちをもち、それに応えようとする心が素晴らしいことに気付かせるように話し合わせることが大切である。

4 児童の反応

(ワークシートより)

・いつもピーマンの入った給食を残してごめんなさい。たった4人の先生が602人分の給食を、こんな暑い中作ってくれてるなんて知らなかった。感謝していただきます。今日は、ピーマン食べるからね。

(自らの生活を振り返って・児童の発言より)

・私は本を読むのがあまり好きではなかったけど、友だちが「この本、明日までに100ページまで読んでおいでよ。」と、自分の大切な本を貸してくれた。私は、がんばって読まないといけないと思って約束通り読んだ。そうしているうちに、なんか本を読むのが好きになった。

5 実践者からの一言

・学校生活の中で目に見えて変わらうな成果はみられないが、この授業を通して改めて友だちや家族に支えられたり助けてもらっていたりすることを自覚できたのではないかと思う。また、自分が感謝されていることも知り、驚きと喜びを感じた児童もいた。常に感謝の気持ちをもって生活するということは、とても難しいことである。しかし、そのことを振り返り、心を温める場と時間は必要である。それが、道徳の時間でもあると思う。その積み重ねによって、豊かな心が育まれるのではないかだろうか。

(東浄小学校 川手香苗)